

不安を募らせ、傷つきながらも、自分を取り戻し
生きる展望を見出そうと、居場所につどう子ども・若者たち
お互いに支え合いながら、自立へと向かう

2019年度 事業名

不登校・ひきこもり経験者の中間就労体験と 地域住民との共生を支援する 事業



災害公営住宅での茶話会
被災住人と若者、スタッフとの交流

独立行政法人福祉医療機構
社会福祉振興助成事業



電子部品の組み立て作業

NPO法人
みやこ自立サポートセンター

岩手県 宮古市

代表 大向正昭

台風19号による土石流が当施設を直撃
建物の側壁と玄関を打ち破り流入



目 次

1 報告書作成にあたり ······	1
(地域の現況、事業の特徴、関係機関・協力者への謝意)	
2 事業の展開 ······	2
柱だて 1 不登校・ひきこもり経験者への中間的就労体験事業 (2~3)	
柱だて 2 不登校・ひきこもり経験者と被災者・地域住民 との共生を支援する事業 (4)	
台風 19 号災害復旧作業 (被災により「柱だて 1」に追加) (5~9)	
3 まとめにかえて ······	10

(地域の現況、事業の特徴、関係機関・協力者への謝意)

1 報告書作成にあたり

東日本大震災から9年目にあたり、街並みの整備も進み、見た目には復旧・復興したよう感じられます。しかし、そのような外観とは別に、生業を奪われた人々、生活の場、家を転居せざるを得なかつた人たち、災害公営住宅での住みづらさ、当時児童生徒だった若者たちの心の問題、震災後の2度にわたる台風被害など、被災に関わる課題は山積しています。

不登校・ひきこもりの支援を通じて、あの震災の後で、この子ども・若者たちが支援する側に転じ、自ら動きだしました。居場所に来る若者たちの多くが巣立ち、飛び立っていきましたが、その延長線上の活動、行動として、表題の事業を展開することになりました。

今いる若者たち、新しく加わった者とで、自立に向けた訓練や交流、地域住民との共生を支援する事業です。特に孤立しがちな災害公営住宅の住人を対象に、要望を受け入れながら実施してきました。

その後実施の中の10月、台風19号の被害に遭遇したことを特筆したい。もう、この事業どころではない。若者の自立支援そのものができるかどうか。居場所の回復は無理かも。そう思うくらい、壊滅的な打撃を受けました。

復旧作業をどのようにしたらよいか、市の担当課、市議の方等に相談しました。地元の建設会社がショベルカーでやって来て、1メートル超積もつた側壁の土砂を取り除いてくれました。同時に私たちスタッフも、室内に同程度溜まった泥土をかき出し、土嚢袋で運ぶ作業を開始しました。居場所を開設する火、木、土の午後1時から午後の3時まで、重労働でした。

新聞、テレビ等報道で知った方々が、すぐに駆け付けてくれました。盛岡から県自立支援センター副会長さんが若者を連れてほとんど毎回。また気仙父母会からは自身も居場所を設けて若者支援に携わっている会長さんが、欠かさず参加。遠野父母会からは団体で数名が来所し、手伝ってくれました。また、私たちの父母会（会員メンバー）、若者たち、近所の住人、知人の方々にも協力いただきました。改めて感謝と御礼の言葉を申し上げます。

大変ありがとうございました。

今年1月以降、何とか部分回復ではありますが居場所、作業場の一部を確保し、ほぼ通常通りに開設できるまでになりました。

この台風19号による被災で事業内容の変更を余儀なくされました。復旧作業を若者の中間就労体験の場に、また復旧作業の場そのものが、地域住民との共生を促す場にもなりました。大震災後の若者による復興支援と同様です。このような復旧復興作業や支援の中で若者たちが育ち、巣立っていく。事業内容の変更を認めていただきました独立行政法人福祉医療機構の担当者、関係者の方々に、深甚なる感謝を申し上げ、報告書作成のあいさつといたします。

2 事業の展開

柱だて1：不登校・ひきこもり経験者への中間的就労体験事業

(1) 目 的 社会への適応に困難を抱えている人たちへ、中間的就労体験や進路の機会を提供する。

(2) 実施内容 清掃作業（47回、参加者累計121人）

電子部品の組み立て作業（7回、参加累計18人）

木工作業（5回、参加累計14人） 草刈り（5回、10人）

陶芸体験（3回、参加累計10人）



電子部品の組み立て作業で、業者の方から説明や手ほどきを受けているところ。

これらの作業に年間を通じて111回行う予定でした。清掃作業と電子部門の組み立て作業は毎週火曜日と木曜日の週2回2時間実施の計画を立て、進めてきました。

しかし、電子部品組み立て作業は米中貿易摩擦の影響を受け、中国からの発注がめっきり少なくなり、ついに7月で中止しなければならない状況に追い込まれました。



勤労青少年ホームでの清掃作業
附属の体育館を清掃している様子



電子部品の組み立て作業。
指サックをはめながら、細かい作業を繰り返す。正確さと速さが訓練されます。

(3) 中間的就労体験の意義

震災後、ボランティア活動を中心とした支援活動を実施し、子ども・若者たちのモチベーションも高まりました。ボランティア活動で得た自己肯定感や自信、意欲は中間的就労体験でさらに磨かれ就労に近づくと思います。

しかし、そのような図式の一面化にとどまらず、人によって様々な選択肢の1つとして有効でもあります。

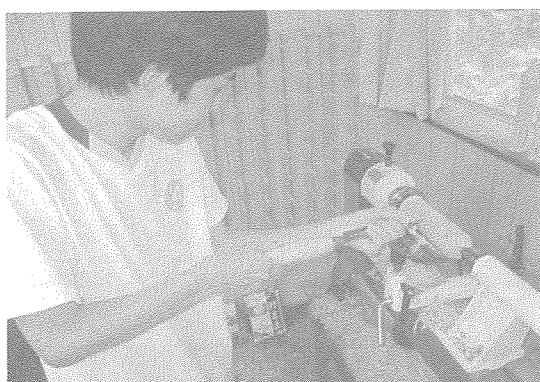
若者たちの中間就労体験では、「労働、俺は働いている」という実感が得られているのではないかと思われます。

子ども・若者たちは多種多様、様々です。全てがとか、こうすればこうなるというような一律、画一的な立場、方法はとるべきではありません。子ども・若者の意向、意思、要望に依拠して、自分が選択した道に寄り添って支援し合います。



勤労青少年ホーム清掃作業

玄関、入り口の所を掃除しています。



木工作業ではこけし作り体験を実施



草刈りボランティア作業をしているところ



陶芸体験 台座を回しながら形を整えます



陶芸体験での絵付け

柱だて2:不登校・ひきこもり経験者と被災者・地域住民との共生を支援する事業

(1)目的　　自立に困難を抱える人たちと被災者や高齢者住民とが共生できる関係性を模索する。

(2)実施内容　「さをり織り」体験交流会（14回、参加者累計32人）
茶話会（24回、参加者累計161人）

大震災の復興支援の一環として、災害公営住宅でのお茶会を中心に交流を実施してきました。世間話をしながら、要望も取り入れ、楽しく実施。その中で「さをり織り」を取り上げたり、趣味に興じたり、料理教室なども実施してきました。



趣味の囲碁に没頭する二人



茶話会の中での「さをり織り」体験
孫連れのお年寄りが真剣に織っています

(3)被災者・地域住民との共生の意義

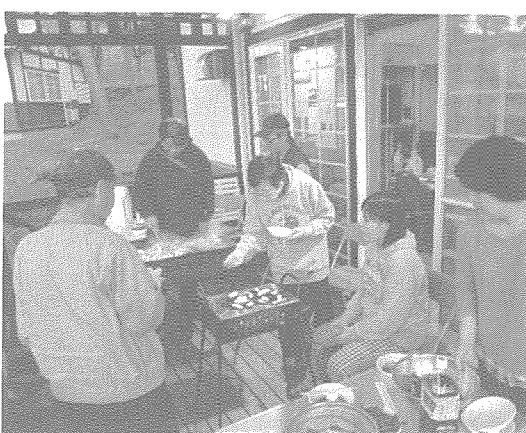
災害公営住宅に移った方々は仮設住宅より快適な生活と思いきや、新たな難しい生きづらさが。集会室が居場所として

使えず、鉄の扉は重く牢獄のよう。隣同士の交流がなく、他との接触を避け、ひきこもる人々も多い。そのような状況でも茶話会に、楽しみつながりを求めて参加しに来る人たちもいます。

ひきこもりという社会的「弱者」と被災「弱者」が結び合い、「ありがとうね」と声をかけられると、若者たちも元気を貰います。「弱者」同士の支援は響き合います。



テーブルを囲んでの団欒



料理教室ではみんなで料理をつくり、その後で試食（会食）します

台風19号災害復旧作業(被災により「柱だけ1」に追加)

- (1) 目的 災害で破壊され、使用できなくなった施設を回復し、当自立支援センターの役割が継続できるようにする。
- (2) 実施内容 復旧作業として ○泥だし・土砂取り除き作業、○DIY 復旧作業
(38回、参加者累計 171名)

被災直後から復旧作業に着手するまでの様子を当センター（父母会）通信「ひまわり」
11月号、視座より

阿 鼻 叫 喚 土石流がサポセン建屋を直撃

視
座

台風19号が10月12日（土）から13日（日）にかけて、宮古地方を激しく襲いました。雨が止んだ後、心配で訪れた自立サポートセンターを見てビックリ、唖然としました▼建物が

土石流で埋まっているではありませんか。「メートル超の土砂とともに岩石が、相談室と玄関の側壁を直撃し、破壊したうえに、居場所兼事務室をメチャクチャにしました。さらに作業場一室にも泥が入り込んでいました▼唯一、不幸中の幸いであったのは、誰もいない真夜中の出来事であつたことです。もし開場中であつたなら人命にかかる大変なことに、と思うと身が震えます。パソコン5～6台、プリンター、事務機器、その他の必要物品を損失しました。最も重要な活動データーが残っているかどうかです▼被災後は部屋の泥、土砂上げに追われました。震災の時もそうでしたが、多くの人たちの支援を受け、本当に有り難く感じています。盛岡ボランから畠山副理事長や若者たち。遠野の父母会のみなさん。陸前高田から佐々木善仁父母会長。宮古の若者たち。地域の方など、多くの方々が駆けつけて、手伝つてくださいました▼人力だけではあります。温かい仲間の言葉や報道、市行政が私たちの活動を理解し、励ましてくれました。その思いに応えながら、あまり無理をせず、気長に普及作業に携わっています▼まだ、目途は立つていませんが、父母会、居場所は絶対に必要なもの、その灯は消せないと心新たにしています。

みなさんのご支援、ご協力に深く感謝いたします。

大変ありがとうございます。

再開するまでは、被災自助活動と若者の支援活動として次の日時で実施します。

毎週 火、木、土 …13:00～15:00

台風19号被災からの立ち直り

「ああ、もうこれで終わりか」そう思われるほど壊滅的な打撃を受けました。新聞等でも報道され、多くの方々が駆け付け、支援してくださいました。その支援に励まれ、居場所の灯は消せない一心で立ち直ることができました。

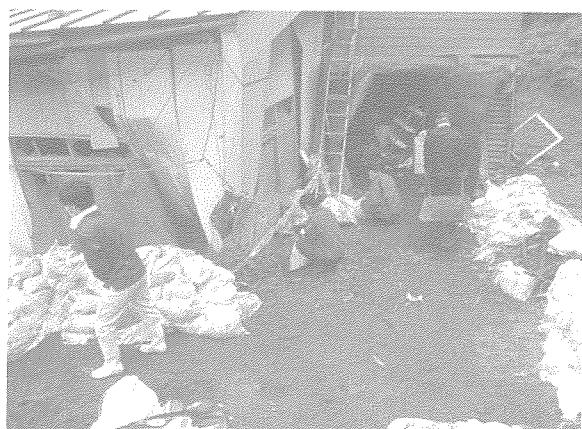
感謝の気持ちを通信「ひまわり」2月号、「視座」より

視 座

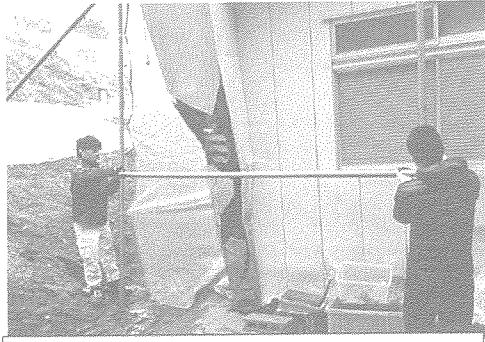
台風19号による当センターの被災。その修復と支援が東日本大震災と重なります。あの大震災、大津波後の惨状を見て、これで宮古も終わりかと思いました。市民の力では何ともならない絶望感、虚無感でした▼私たちの施設は無事でしたが、心の寂寥を救つたのは全国各地からの支援でした。物資だけではありません。心が温まる励ましや労り、「何か欲しいものは」「子どもは大丈夫ですか」など、優しさに和む安らぎに満ち溢れました▼この度の土石流による支援センターの直接被害を除けば、あの時の状況と全く同じです。泥上げ作業に、多くの労力を費やしました。県内の各地区の父母会の方。特に陸前高田の佐々木善仁会長。ポランの広場からは畠山副会長が若者を連れて何度も訪れ、手伝ってくれました。そのほか宮古の若者、地域の方々のお世話になりました▼多くの方々からの救援メッセージも震災復興支援の時と同じです。周りで困っている人や状況があるときの、若者たちの立ち上がりも同様です。その辯に支えられて、復興に立ち上がるのですね▼本当にお陰様でした。一部を修復し、居場所の役割を果たせるまでになりました。つい先日28日（火）にはトン汁の食事会を楽しく実施し、盛り上りました。これが縁で結びついた若者同士がいます▼みなさんに支えられて復旧し、運営しているサポートセンターです。自分の居場所として、子ども・若者、父母・大人も自由に利用してください。



被災直後の散乱した建物内部の様子



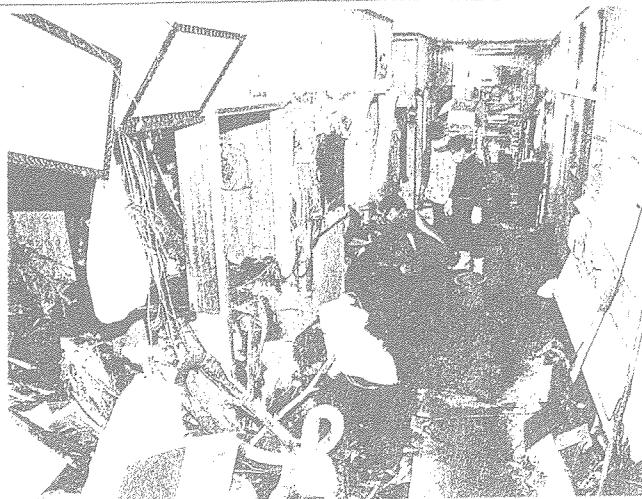
内部の泥だし、土砂片づけ作業。土嚢袋2千個以上、並べきれない袋を山積



DIY復旧作業、外壁の補強と目隠しの設定を行う若者たち



DIYでの廊下の板張り替え作業



壁を突き破り、大量の土砂が入り込んだ
みやこ自立サポートセンターの施設内

野 大船渡など各地区の父
母会メンバーらが集い、土
砂を土のうに詰めて外へと
運んだ。室内の土砂は高さ
1 床まで達し、今後も作業
を継続する。

台風19号の豪雨で隣接す
る市営八木沢団地住宅の一
部の家具は窓を割つて屋
外まで押し出された。木造
一戸建ての施設の5部
屋中3部屋に土砂が入り、
ソコンなども被災。これま
での活動の記録写真を保存

22日は利用者や盛岡、遠
野 大船渡など各地区的父
母会メンバーらが集い、土
砂を土のうに詰めて外へと
運んだ。室内の土砂は高さ
1 床まで達し、今後も作業
を継続する。

台風19号の豪雨で隣接す
る市営八木沢団地住宅の一
部の家具は窓を割つて屋
外まで押し出された。木造
一戸建ての施設の5部
屋中3部屋に土砂が入り、
ソコンなども被災。これま
での活動の記録写真を保存

自立支える 施設に打撃

宮古のNPO法人

宮古広域の引きこもり者や不登校の児童生徒を支援するNPO法人みやこ自立サポートセンター（宮古市八木沢、大向正昭理事長）は台風19号で大量の土砂が施設内に流れ込み、大きな被害を受けた。土砂のかき出し作業には多くの人手が必要で、施設復旧にも多額の経費が見込まれる。高齢スタッフがほぼボランティアで継続してきた支援活動だけに、関係者は苦悩している。

大量の土砂、再開遠く 復旧へ協力を呼び掛け

状では全てが不透明だ。皆さんの協力を願いしたい」と呼び掛ける。施設復旧の寄付金の振込番号222498161、名義トクビ（ミヤコジリツサポートセンター）。問い合わせは電話復旧後の28日以降に同センター事務局（0193・633・4135）へ。

大向理事長は「何とかして活動を再開したいが、現

2019年10月23日(水)

宮子日報より

10月23日(水)朝日新聞より

「居場所大切」片付け手伝う

台風19号で、引きこもりの人たちを支える福祉施設に土砂が流入し、機能が停止した。東日本大震災で引きこもりの次男と妻を亡くした佐々木善仁さん(69)は、「ざんげの気持ちを胸に片付け手伝う。」といった「居場所」の大切さを身にしみて感じているからだ。

11月上旬、富吉市八木沢4丁目のNPO法人「みやこ自立サポートセンター」で、佐々木さんは職員や利用者らと、建物内外の土をスコップでくつぐりながら、作業を黙々と進めた。

ののり面が崩れ、押し寄せた大量の土砂や岩は壁を破って玄関を壊し、相談室の床を抜けさせた。10~40代の不登校や引きこもりで悩む約10人の利用者は、ちょうどとした相談や就労体験などができるセンターを使えなく

なった。
県内に2カ所しかないというこうした施設の状況を放っておけず、佐々木さんは週に2回のペースで陸前高田市の自宅から車で訪れる。「一日も早く、引きこもりなごで悩む子供たちが安心できる場所を戻したい。それが自分の義務」

震災の津波で、妻みき子さん(当時57)と、引きこもりだった次男仁也さん(同28)を亡くした仁也さんはみき子さんの「逃げよう」という説得に応じず、逃げ遅れた。

2011年3月末まで同市立広田小学校で校長を務めた佐々木さんは、「仕事人間」で家族より学校を優先していた。仁也さんの引きこもりを「俺の子だから何とかなる。退職後に向い



土砂が流入し、壁などが壊れたみやこ自立サポートセンターで職員らが泥かきをしていた。いずれも田、富吉市八木沢4丁目

だ。罪滅ぼしだった。相談者の悩みに触れ、みき子さんや仁也さんのつらさが分かつてきた。また、引きこもり人が災害に遭った際、どう助ければいいのかということを考え続けている。

だからこそ、引きこもりの人たちが外に出るきっかけになるような居場所が大切だと感じた。

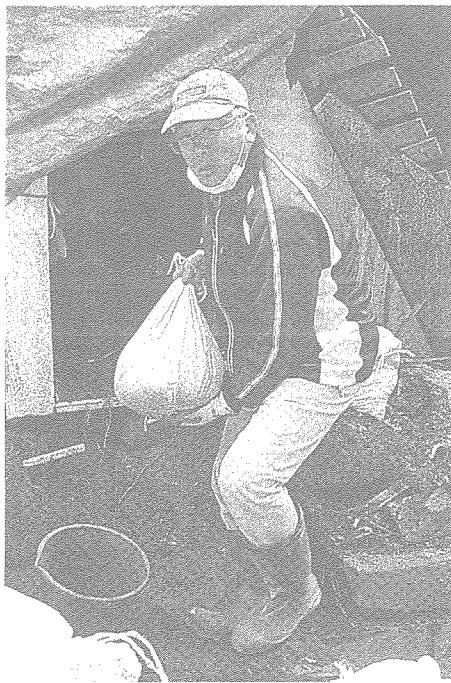
台風が通り過ぎた10月13日、土砂に埋もれたみやこ自立サポートセンターの惨状を見て、大向正昭理事長(70)は再開を半分諦めた。だが、佐々木さんははじめ、利用者や父母らが熱心に泥かきしてくれる様子に心を打たれた。出した土壟は1500個以上に。年内にセンターを開するという目標ができた。

佐々木さんは今後も、センター再開の手伝いをしていく。

「みき子さんと仁也さんに少しは認めてもらえるかな」

(緒方雄大)

津波犠牲の引きこもり次男に罪滅ぼし



土壟を運ぶ佐々木善仁さん

台風被害の福祉施設で69歳男性



の合せばいい」と思っていた。みき子さんからの相談にも耳を傾けなかつた。震災直後は学校に寝泊まりし、学校の子供たちの安否確認を最優先した。犠牲者はおらず、ホッとした。

退職後、不登校で引きこもりの子供を持つ「親の会」で活動していたみき子さんの後を繼い

引きこもり支援施設 宮古利用者から安堵の声 台風の被害から復活

台風19号で被害を受けた
引きこもりの人たちを支え
る福祉施設が復活した。何
げなく訪れることができ、
社会復帰への一歩になりう
る「居場所」だ。利用者か

ら安堵の声が聞かれた。

「お母さんは元気にして
る?」。12月下旬、宮古市
八木沢4丁目のNPO法人
「みやこ自立サポートセン
ター」の事務室で、大向正
昭理事長(70)が利用者の男
性(28)に声を掛けた。

引きこもりがちのこの男
性は、10年ほど前から不定
期にセンターを利用してき
た。「ここはただいるだけ
で良い場所だけど、外に出
るきっかけになる。再開し
て良かった」

昨年10月の台風で、セン
ター正面の入り面から崩れ
てきた土砂や岩が壁を破つ
て玄関を壊し、相談室の床
が抜けてしまった。引きこ
もりなどで悩む10~40代の
利用者約10人は相談や就労



きれいに片付いた事務室で
利用者と語り合う大向正昭
さん(宮古市八木沢4丁目)

体験ができなくなつた。
こうした居場所をいち早く
復活させようと、スタッフ
が利用者とともに週に3
回のペースで土砂を取り除
く作業を進めた。張り替え
た新しい床などの資材は約
75万円の寄付金を充てた。

事務室の机の配置は利用者
の意見を参考にした。

利用者が復旧作業に携わ
つたことについて、大向さ
んは「自信を持つきっかけ
になつたのでは」と話す。
センターは無料で利用で
きる。詳細は大向さん(0

70・4097・379
4)まで。(緒方雄大)



みんなで楽しく会話を進みました

復旧作業によって居場所を確保、その修復を祝つ
て食事会。その様子を通信「ひまわり」2月号より

みんなで楽しく豚汁の食事会

本当に美味しかった。豚肉と野菜の煮汁が
溶け合って、うまいを増長させます。調理に
は若者にも手伝ってもらいました。調理をし
ながらも話がはずみます。前に通所していた
H君と来所間もないS君は、子どもの頃の知
り合いでした。

「同じ学校じゃないけど、将棋教室に通つ
ていたよね」。「20年近い前のこと、顔かた
ちもちがっているし、分からなかつたよ」。食
事後は早速二人で将棋対戦、将棋以外でも話が
盛り上がっていました

3 まとめにかえて

当センターで事業をすすめるにあたって、居場所の果たす役割はきわめて重要で大きい。不登校・ひきこもりの子ども・若者にとって学校に行ける、行けない。仕事に就く、就かない以前に、安心して居られる場、失敗が許され、安心して過ごすことができる自由空間が必要だからです。

したがって居場所には作業やものづくり、体験活動などメニュー化した課題はあまり存在しません。

メニュー化はしませんが、だれでも自由に参加できる「さをり織り」体験、料理教室、陶芸教室、ミニ盆栽づくり、こけしづくり、パソコン教室、食事会、交流会など多彩に展開してきました。また、居場所からあちこちに出かけ、ボランティア活動や体験交流も行ってきました。ただ居ていい所ですが、そこを拠り所に自分の好きなことができる基地のようなところもあります。その若者たちが、大震災後の被災支援に立ち上りました。

被支援者であるはずの若者が支援者となったのです。支援者という言葉は一方的です。誰もがその状況に応じて被支援者であり、逆に支援者になりうる存在です。今、全国の「実践」交流の会では、協同実践という言葉を使用しています。そのような中で。多くの若者たちが巣立っていきました。

私たちの子ども・若者への支援は、本人の要望に基づいた支援です。また、若者たちと一緒に行う被災者・地域住民との共生をはかる事業も、その方々の要望をできるだけ取り入れた事業でした。其の辺に、頼り頼られる関係性が生ずるのではないかと思われます。

災害公営住宅での茶話会やさをり織り、料理教室などへの参加者は決して多くはありませんが、普段はひきこもりがちなお年寄りたちです。このような方々に寄り添い、支え合う活動が必要だと思います。

台風19号による災害復旧作業には、あまり姿を見せなくなった若者や、新たな若者を含めて、居場所の復旧のために精力的に作業をすすめってくれました。それに地域の方々も参加し、協同の仕事を実施した喜び、「きずな」も生じました。

この事業を通じて、私たちスタッフはいろんなことを学び、子ども・若者たちはたくさんのこと経験しました。そのことが明日への成長につながっていくことと思います。

大変よいお仕事をさせていただき、ありがとうございました。

発行日 2020年 4月16日
作成・発行
NPO法人みやこ自立サポートセンター
代表 大向正昭
編集 中村信之
住所 宮古市八木沢4-1-25

印刷・製本
宮古印刷
代表 岡道文彦
住所 宮古市近内3-28-1